

# 略年譜と戦時体験

椽川一朗

一九二〇年（大正九年）九月三日

岐阜県本巢郡根尾村水鳥に椽川順熙・敏子の長男として誕生。父は浄土真宗本願寺派（西本願寺派）西光寺（同部落所在）住職。説教の締括り「思い出しては御念仏」は、無責任なようで、じつは親鸞の他力信仰を要約した名文句だった、と、今になって感心している。譬え話に禅問答が多かったこと、一向一揆の伝統を色濃く残す「越前坊主」の出身で、神道嫌いだっただけなどが、思い出される。家付きの母は、女系家族的な家に生れたせい、谷崎潤一郎訳『源氏物語』出版とともに購読、学生時代の私に紫式部熱の素地を植付けてくれたような気がする（両親とも二十余年前、死亡）。

一九二七年（昭和二年）四月

根尾村樽見尋常高等小学校尋常科入学、六年後卒業。

一九三三年四月

岐阜県岐阜中学校（県立）入学、五年後卒業。この間、岐阜市に下宿生活。

一九三八年四月

官立第一高等学校文科甲類（第一外国語英語、第二ドイツ語）入学。入学後二年間は全寮制で目黒区駒場校地内の寮に、三年生るとき校外の下宿に生活。親鸞研究のため仏教哲学を修めるにはカント『純粹理性批判』を読むよう先輩から奨められて、ドイツ語の勉強に努め、三年生の夏休み前後を通して、同書の原書を読了。同書の難解さに圧倒されたい

え、クーロフイッシャーのカント伝でカントが社会科学に詳しかったと知ったため、大学は西洋史学科を選ぼうと考えようになった。なおカントがデカルトの原文を度々引用しているので、フランス語の勉強も始め、高校の石川剛・川口篤両教授の課外授業に参加した。たまたま同年（一九四〇年）六月、フランスはドイツに降伏したが、その時フランス政府が国民に「パリの美しい町並みを戦禍にさらしたくないから降伏の途を選ぶ」と語りかけたことが、忘れられない。二学期には、哲学書を読むのに欠かせないラテン語の勉強も始めたが、これは後日、中世史の史料を読むのに役立った。

また同年聞いた講義中、西洋史の亀井高孝教授が「ギリシャ文明に学んだローマがギリシャを支配したようにヨーロッパの分家アメリカが西洋の主人公になる」と予言されたのは、どこまで当たったかは別として、当時としては思い切った発言だった。と近頃あらためて感服する。その頃の日本では「ドイツのヒトラーがヨーロッパを征覇する」と信ずる人が、圧倒的に多かったからである。ともあれ私の在学中「一高」教授陣は自由主義者が揃っていた。（以上三先生とも故人）。

一九四一年四月

東京帝国大学文学部西洋史学科入学（無試験）。同年二月八日、真珠湾攻撃開始直後、対米英宣戦布告。その日の午前、西洋古代史の村川堅太郎助教授からローマ経済史の講義を聞いて、外へ出たら日米開戦のニュース。「アメリカと戦えば必ず負ける」という理由から、対米戦争はない、と信じていただけに、大きなショックだった。昼休み時の正門付近では、音楽同好会の電蓄からドヴォルザークの『新世界より』がヴォリュームいっぱいに流れていた。当時、大学生の多くが、開戦に反対だったわけで、その後、この、いわばアメリカ交響曲は政府から演奏を禁止され、レコードで聞かせることも許されなくなった。

西洋史学科学生室では、自由主義者をもって自任する矢田俊隆・金沢誠両先輩が助手ないし副手として、われわれ学生を指導してくださった（矢田氏は現北海道大学名誉教授、金沢氏は学習院大学名誉教授だったが今は故人）。級友の間で平出宣道君（のち明治学院大学学長）が経済史研究会を提唱し、阿部玄治君（現千葉大学名誉教授）らとともに私も参加

した。そこでの勉強が基になって、私は卒業論文の分野としてドイツ・フランス中世社会経済史を選び、山中謙二教授のご指導のもとに卒論を書くことになった。

二年生になって、卒業が半年繰上がるの聞かされ、あわてた。ともかくも三年生になった六月末、卒論「コンソルテーストとコリベルティ」を書き上げて、提出した。夏休み直前だったかと思うが、突然、同級の津田弘英君から「今井さんが呼んでるよ」と言われ、二人で教官室に今井登志喜教授をお訪ねした。すると先生は「君の卒論を史学雑誌に載せることにした」とだけ用件を言い、あとは西洋料理の話か何か、しばらく愉快なお話を伺って部屋を出た。（以上の三先生も故人。津田君の家は今井先生と私的なお付き合いがあった由だが、同君は早世。）

一九四三年九月

二年半で大学を卒業。同年『史学雑誌』一二月号に、卒論がそのまま掲載された。その間、同年一〇月から翌年三月まで、郷里に近い県立本巢中学校で歴史を教えたりしたが、卒論が破格の扱いを受けたのは、あとで考えると、特別な事情があった。

それは同四三年七月の史学会改組で、編集担当の平泉澄教授らが理事を辞し、坂本太郎助教授が編集担当理事に就任。のちに、今井先生から「平泉君は神道関係の論文だけを集めていたので辞めてもらった」と伺った。改組は、敗戦の二年前で、このとき史学会は、早くも「戦後改革」を断行したわけであり、今井先生は、理事退任後も評議員として、その後を通じて理事長だった辻善之助名誉教授とともに、改革の中心であり続けたようである（史学会編『史学会百年小史』一九八九年刊参照）。なお平泉氏が軍部に迎合した所行の数々は、あらためて言うまでもなく、私の学生時代も、級友から「平泉の国史講義で優をもらうには屈辱的な条件が要るから良で我慢しろ」などと聞かされていた。

ともあれ史学会の改組は成功したものの、研究者がごっそり徴兵されたあとで、まともな論文が集まらない。そこで私の拙い卒論が今井先生のお目にとまって、史学雑誌に載ることになった次第である。もちろん卒論のお粗末さは、今思っ

ても冷汗ものだが、掲載が一生のあいだ励みになったという意味で、私自身の研究生生活にとっては幸運だった。

ところで戦争のさなか史学会の改組が成功したのには、いろいろ背景があった。今井先生が一九三九年いらい文学部長として大学の重鎮だったことが、その一つであるが、それには、もう一つ背景があった。それは、三八年、元陸軍大臣荒木貞夫大將が近衛内閣の文部大臣となり、「大学から自由主義を一掃する」と呼号して、手始めに「東大肅学」に乗出したことに、関係する。そのとき東大を代表して文部省と折衝の重任を負わされたのが、当時大学の一評議員だった今井先生で、先生没後、久代夫人から「今井は辞表を懐に文部省に日参いたしました」と伺った。先生の誠意が半ば実って、自由主義者として有名だった経済学部河合榮治郎教授は犠牲になったものの、それ以外のことは大学側の自由な処置が認められたらしい。今井先生が中心になって法学部の田中耕太郎、経済学部の上野道輔ら数人の教授が、平賀讓総長のもとで、いわゆる平賀肅学を行なった。河合教授への休職処分とともに、軍部寄り経済学者土方成美教授も同じ処分を受け、さらに河合教授に殉じた木村健康助教授・美濃部亮吉助手のほか、土方派の教授・助教授がいっせいに辞任したのである。こうして荒木肅学は結局、平賀肅学あるいは今井肅学となり、今井先生は押しも押されぬ重鎮となった。しかも、河合・土方両教授以下の後任には、自由主義ないしは左派の学者が招かれ、その一人が大塚久雄助教授だったと聞く。(以上、今井先生著『近世における繁栄中心の移動』の改版『都市の発達史』Ⅱ一九八〇年の林健太郎筆解題を参照)。その間に今井先生は荒木大將と親交を結ぶに至ったようで、同大將に取入った程度の平泉氏は、おそらく史学会改組の不満を訴えたであろうが、荒木氏は取合わなかったらしい。戦後、荒木氏が連合軍の法廷で戦争犯罪人として裁かれた頃、今井先生は「荒木さんは軍人だが約束は必ず守る人だった」と洩らされた。それは、肅学の結果について苦情が出なかった、という意味だったろうが、史学会改組の件も含まれていたかもしれない。なお先生は、改組の件で「辻さんに助けってもらった」と言われたが、辻理事長は明仁天皇誕生の儀で文章博士もんじょうはかせの役を務め、宮中席次が高かった。

東大文学部西洋史学科副手（嘱託）となり、金沢助手とともに研究室に勤務。史学雑誌の編集をも命ぜられ、以後六年余、国史の笠原一男・井上光貞氏らと雑務に従事。（なお前年四月から大学院に在籍。同一〇月、いよいよ徴兵されそうになって、豊橋の陸軍予備士官学校に志願し、合格したが、入校の日、老軍医から「君は学問をやった方がお国の為になる」と言われ、翌朝、帰郷を命ぜられた。志願をしたくせに言うのは気がひけるが、徴兵におびえた日々が恨めしく、戦争を嫌う気持は、終始変らない。）

同年春頃、西洋史研究室などの洋書を長野県松本市郊外に「疎開」。今井先生・金沢助手およびフランス文学科辰野隆教授・森有正助手らと同行。

同年五月、東京に二度目の米軍大空襲があり、今井先生のお宅も焼失。

その頃から、東大西洋史研究室で、金沢助手を中心に、数人の学科卒業生が集まり、戦争の行方を話し合うようになって。やがて参謀本部詰の新聞記者二人（ともに学科OB）が加わり、正確な——戦後の占領軍発表と一致したほど正確な——情報が伝えられて、お喋りに熱が入った。それは当然、敗戦の予測となり、たぶん七月には、話はマッカーサーの占領政策に及んだ。ある日、誰かが「天皇はどうなるのか」と言い出した。マッカーサーは天皇を残すだろう、という結論になったが、そのとき私は「かれは開戦前フィリピン駐在が長かったから東洋人の気持ちがよく分かっている」と、天皇制温存の理由を述べた記憶がある。それとともに、天皇制論議を最後に、何回も続いたお喋りの集まりが、途切れたような気がする。マッカーサーが占領政策に天皇を利用したのは、われわれの予想の通りだったが、いま思うと、あのお喋りは、参謀本部と今井先生の諒解のもとに行なわれた、敗戦シミュレーションではなかったか、という気がする。そこで想像してみると、当時、参謀本部には荒木派（皇道派）の将校が幾人か居たのではないか。そして、かれらは、ひそかに降伏を考え、そのためには米軍が天皇制を温存することが、必要だったろう。つまり軍部に降伏を呑ませるためには「国体の護持」が最少不可欠の条件だったに違いない。そうすると西洋史研究室でのお喋りは「国体護持を唯一の条件とするポ

ツダム宣言受諾」という降伏派指導層の手助けをしたことになる。言うまでもないが、当時、東大の構内には憲兵がウヨウヨしていた。ところが西洋史研究室の度重なる集まりは、いちども手入れを受けなかった。これは荒木派黙認のお喋りだったから、に違いない。今井先生は、お喋りの場には姿を現わさなかったが、その内容はよくご存知だったと思う。それにしても金沢助手が、お喋りの中味を密告するような人間を、ひとりも入れなかったのは、今井先生の信頼に答えるだけの眼力の持ち主だったわけで、敬服にあたいする。(ただし、その後、昭和天皇が諸外国にたいする開戦の責任も、国民にたいする敗戦の責任も、いっさい取らなかつたのは、源氏物語の評釈書『河海抄』で左大臣源善成が朱雀院退位の事由を天変地異とした感覚と比べて、あまりにも違い、失望を禁じ得ない。その意味で、敗戦シミュレーションでの私の発言は、けっして名誉なことではないが、今井先生としては、戦争の終結を何よりも願っておられたのであろう。)

同年（一九四五年）八月

上旬、私は夏休みを口実に帰省し、ほかに読むものがないので有朋堂文庫版『源氏物語』を読んでいた。一五日の「重大放送」の予告を聞いて、いよいよ停戦、と思つたが、「玉音」の内容は判断しにくかつた。まもなくラジオの解説で降伏の事実を知り、ともかくもホッとした。数日後、お盆の法会があり、父に代つて説教壇に上り、敗戦の事情やマッカーサーの占領政策を説明して、集まつた人々に納得してもらい、かつ安心してほしいと付加えた。そして最後に、戦時中、軍部が天皇を神として仏教やキリスト教に圧力をくわええた事実を話し、キリスト教徒のマッカーサーは仏教にも寛容だろうと言つて、これからは迷わず父の説教を聞き、信仰を深めてほしい、と結んだ記憶がある。

同年一〇月

東大文学部特別研究生となり、文部省奨学金を受給。助手の仕事もすることになった（一九五〇年春まで）。専攻分野については山中先生の、また広く学問論の面では今井先生のご薫陶を受けた。もつとも、今井先生は、訓誡めいた言い方が大嫌いだったが、一度だけポツリと言われた。それは「これからの西洋史は日本史や東洋史に劣らぬ実証研究をやると

同時に歴史学のために大きなパースペクティヴを立てることだね」というお話で、私には無理なご注文のように聞こえた。しかし、その後、年月を経て、ようやく先生のひとことが強く思い返されるようになった。

その頃、先輩の故倉橋惣三氏（生前法政大学教授）から、こんな話を聞いた。――刑務所から解放された共産党の大幹部志賀義雄氏が、倉橋氏に「今井さんによろしく」と言った、というのである。倉橋氏によれば、今井先生は戦争中、幾人も共産党員を助けたらしい。それも、今井先生と荒木元大将との関係を考えれば、あり得ないことではない。今井先生はマルクス主義者ではなく、資本論は読まれたことがない様子だった。しかし戦時中、共産党員が戦争に反対した事実には、感銘を覚えられたのではないか。先生は、戦後、疎開先の洋書を引取りに行かれたさい、松本市での講演で「戦争は外交手段のうち最悪の選択だ」と強調された。戦争末期、そんな今井史観が荒木大将を動かしたのかもしれない。

一九四六年

たぶん夏前、今井先生はじめ先輩の林健太郎（のち東大総長）・金沢誠・板倉勝正（のち中央大学名誉教授で故人）諸氏と、占領軍の教育担当官の事務所へ出向いた。新しい中等教育用西洋史の教科書を書いて、日本史などの教科書のお手本にもなるよう、という丁重な依頼だった。早速、アメリカの高校教科書（じつは参考教材）を見ながら、諸先輩と分担して教科書を書いたが、一同が驚いたのは、先生にたいする占領軍当局の信頼の厚さだった。思えば先生は、右は荒木大将から左は共産党幹部まで、多様な人々から信頼を受けておられたわけで、しかも、それは先生の学問上の信念「民主主義と戦争反対」という不動の軸をめぐっての幅広い展開だった。前述の「荒木さんは軍人だったが」という回想が、史学会改組に関わっていたとすれば、それは「荒木さんは主義主張は違っても今や平和のため尽力し始めた人だけあって」という意味にも取れる。おそらく先生は、荒木さんの助命運動もされたのではないか、と思う（荒木氏は戦犯裁判で終身刑に処せられたが、一九五四年、仮釈放）。

一九四七年一〇月

特別研究生の後期（三年間）に入ったが、これは専ら山中先生のご温情によった。

なお同年三月、今井先生は東大を定年退官され、その後、日本大学教授・中央選挙管理委員会（国会議員選挙関係）委員などを務められた。門下生のあいだで、先生の講義を活字にしよう、ということになり、級友だった鳥山成人君（現北海道大学名誉教授）は『英国社会史』の原稿浄書を担当した。同書（四八年初版、五〇年改訂版、東大協同組合出版部）は、わが国の西洋社会経済史研究の草分けとも言うべき今井先生の名著として、世評が高かった。私は、矢田・倉橋両先輩の受講ノートをもとに前記『都市の発達』の前身『近世における繁栄中心の移動』の原稿浄書に当たり、四九年ようやく出版にこぎつけた（誠文堂新光社版）。出来ばえは心許なかったが、同書がオランダ盛衰史でもあったので、のち拙著『西欧』中、オランダの家父長的奴隷制に関する一章を書く素地になった。そして先生は、この『繁栄中心の移動』の刷上りを見て喜んでくださって間もなく、宿痼の再発に倒れられ、逝去された。今の私の年令から見て、早すぎた観があるが、荒木肅学から敗戦処理と、あまりにも心労が大きかったのである。それにしても私は、先生から歴史学者の生き方を教わりながら、終生、一学究にとどまったのは、まさしく不肖の弟子と言うべきであろうか。しかし先生の遺訓「実証とピースペクティヴ」のうち、実証のほうだけは、なんとか忠実に守ってきたようにも思う。本誌の拙稿は、もう一つの「見通し」のほうを、ほんの少しだけ実行してみたことになるかもしれない。

私事にわたるが、その間、一九四八年一月二〇日、妻純江と結婚。妻の父山田龍城は浄土真宗本願寺派敬徳寺（現岐阜市）住職で、当時、東北大学教授（のち武蔵野女子大学学長―故人）。母は英子。私ども夫婦は、焼跡の東京を転々としたのち、五四年、ひとまず板橋区内の住宅公社団地に落着き、その後、武蔵野市内の公団住宅団地、さらに国分寺市内の公団分譲住宅を経て、駒沢大学就職後、横浜市内の現住所を「ついの住み家」とするに至った。本誌拙稿「注93」などに宅地問題を強調するのは、そんな体験の表れで、学問は貧乏しないと分らない、と自から慰めている。

義父山田は印度哲学専攻で、拙著『近代思想と源氏物語』中（一七六頁以下）の、因果経の反体制思想について、私見



の当否を尋ねてみたことがある。「初耳だが成る程」という返事に、一安心した。ちなみに四八年頃、和辻哲郎『原始仏教の実践哲学』を読み、仏教哲学がカントの理論と同じ、と知り、同時に、カント哲学が理解できるようになった。その和辻著の出発点が、駒沢大学の学長もされた宇井伯寿先生の論文だったのは、不思議な因縁ではある（拙著『近代』一六九頁参照）。

一九五〇年五月二〇日

東京都立大学助教授。同三月三十一日付けで専任講師となっていたが、辞令は助教授のほうだけ渡された。

一九七〇年五月二一日

東京都より「欧州各国へ出張」の辞令が出て、この日から一年間、パリ大学・パリ国立図書館で研究。ドイツ・イギリス等にも旅行した。

一九七二年四月一日

都立大学教授。前年、人文科学研究科（大学院）歴史専攻修士課程、翌年、同博士課程設置に伴ない、各課程担当。

一九七五年四月一日

都立大学付属図書館長、大学評議員。同任期二年の後、七七年四月より大学史編纂委員会委員長。八一年『東京都立大学三十年史』刊行後、同委員会解散（六九年の大学封鎖関係は自ら執筆）。

一九八二年（昭和五七年）三月三一日

都立大学退職（准定年）。

同年四月一日

駒沢大学教授、文学部歴史学科担当。前年秋、石川澄雄教授より「阿部肇一文学部長から椽川さんはお西さんですかと聞かれた」と伺った。私が浄土真宗西本願寺派ないし東本願寺派の末寺生れということをご存知のうえで、駒沢大学に

招いてくださると分かり、喜んで着任。

一九九一年（平成三年）二月二一日

駒沢大学より海外研修の辞令を受け、この日、出発（妻と）。ローマ・フィレンツェを経て、三月九日から五月三一日までパリに滞在。国立図書館で研究のほか、フランス国内およびオーストリア等にも旅行。六月一日帰国。

この出張に関しては勿論、日頃なにくれとなく高配をいただいた駒沢大学歴史学科の先輩・同僚の方々に、厚く御礼を申し上げたい。また私の講義や演習に出席の学生諸君、さらには『駒沢史学』に寄稿のさい、お世話になっている学科卒業生諸氏にも、おかげで楽しい思い出の種が出来たことを、感謝する次第である。（一九九二年一月記）

【付記】 一九四五年の敗戦シミュレーションの項は、脱稿後、まだ、どこか、きれいごと過ぎると気になるうち、思い出したことがある。それは天皇の命運が話題になったときのこと、一瞬、言いようのない恐怖が脳裡をよぎったような気がする。あの瞬間、私は同席者のなかの誰かが密告するのではないかと恐れ、思えば恥ずかしい疑念であった。だが結論が出たとき、同席者の顔に安堵の色が浮かんだ記憶が、よみがえっても、くる。もしかしたら、それぞれに密告を恐れ、天皇制温存という結論が出たところで、やっと、その恐れから解放されたのではなかったか。ともあれ戦争とは、そこまで人の心をすさませるものであり、さらに明治憲法下の天皇制は、それほど苛酷なものだったかと、あらためて思わざるを得ない。（一九九三年三月記）